「平和と人権」市民ネットワーク情報　号外 2

事務局 発行(℡ 0557-45-1182) http://peaceito.moo.jp 2016.6/3

伊東の青壮年が伝える沖縄の“今”

若い目で見た真実を語ります。ぜひ報告会にお出かけください

あの忌まわしい事件が沖縄で大きく報道された 5 月 15 日、みなさんのカンパで沖縄へ行った青壮年 4 人が 3 泊 4 日の旅を終えて伊東へ帰ってきました。

「自分たちがこの目で見たこと・考えたことをぜひ多くの伊東市民に伝えたい」と、彼ら自身が企画した報告会が、**6 月 26 日（日）2 時から 4 時 30 分**まで**伊東観光会館第 1 会議室**にて開かれます。浦島浩司さんの沖縄の歌でオープニング。ビデオ「高江のたたかい」も上映して、さらに沖縄の基地問題への理解を深めます。

現地を訪れて彼らは何を感じ取ったのでしょうか。☞ **別紙 or 添付のチラシに彼らの思いが語られています。**

送り出してくれた伊東の人たちに若い目で見た沖縄の真実を伝えたい。☞ これが今回の報告会にこめられた派遣青壮年の思いです。その心を受け止め、何ができるかを伊東市民の目線で共に考えましょう。

会場前にて「憲法 9 条」ポスターや戦争法廃止のチラシを頒布

市民ネットニュース№.5 で紹介した「憲法 9 条」の美しい大判ポスターを用意します。希望する方はぜひ持ち帰ってください。室内に貼っていただけば、訪れた方の目に入るでしょう。屋外に貼りだせば通る人にインパクトを与えます。

また、「戦争ができる普通の国」にするのではなく「戦争を放棄した特別な国」を守ろうというチラシ（戦争させない・9 条こわすな　総がかり行動　伊東連絡会作成）も用意します。（別紙 or 添付ファイルをご覧ください）

これもお持ち帰りいただき、会った人に渡してもらえば会話の糸口になるでしょう。近所の 10 軒にポスティングしていただけば、平和への思いがまわりに広がります。一人の 10 枚も 50 人なら 500 枚。100 人なら 1000 枚。ささやかでも、市民のみなさんの小さな一歩は大きな百歩につながります。

鹿目久美さんのお話し

◆鹿目(かのめ)久美さんは福島市の南にある大玉村から、相模原市の実家に自主避難しました。当時 4 歳の娘さんと一緒に。その時から、現在まで母子はどんな思いで生活してきたのでしょうか。5 月 21 日にアートハウス・ホライゾンで、鹿目さんのお話を聞きました。要点を以下に紹介します。

・福島県の大玉村に住んでいた。大玉村は福島原発から 60 ㎞離れていたが放射能を浴びた。
・3 月 14 日まで、原発の爆発を知らなかった。それまで 4 歳の娘を連れて買い出しに行き、雨の中を何時間も給水の列に並んだ。
・14 日の夜風呂に入って顔を洗うと、皮膚がひりひりした。咳も出た。が、射能のせいだとは思わなかった。
・15 日になって、北の福島市で 20 マイクロシーベルトだと報道されて、ようやく被ばくを意識するようになった。
・ラジオが「30 ㎞以上離れたところは大丈夫」と言うのを信じたかった。安心を得たかった。
・でも、チェルノブイリ事故のように、自分もわが子も後遺症にかかるかもしれないと思って、実家のある相模原市に一時避難した。
・4 月、娘の幼稚園の入園式があって大玉村にもどった。幼稚園でどんな対応をするのか、先生から説明がなかった。お母さんたちも危機感を持っている人は少なかった。国や県の安全プロパガンダをみんな信じていた。
・夏休みまで大玉村に残った。娘は石や土に触りたがった。そのたびに叱りつけて、二人ともストレスがたまった。私は笑顔が少なくなった。娘は鼻血を出すようになった。
・夏休みが終わったとき、子どもが≪福島に帰りたくない≫と言ったことで踏ん切りがついた。子どもは≪福島にいると疲れてしょうわない≫と言った。
・こうして始まった自主避難だったが、村の人には「何で村を捨てるんだ」と言われ、また避難先では「避難できるところがあってよかったね」と皮肉を言われて辛かった。
・子どもを被ばくさせた自責の念にかられ、うつ状態になった。「娘を守るために来たのに、ウジウジしていたら何のために来たのからわからないではないか」と力を振り絞った。
・助けてくれる人もいた。何よりも子どもに助けられた。私の心配をしてくれ、かばってくれた。「子どもを守るために一生をかけよう」と覚悟がついた。
・自分は「避難者」であることにこだわっている。「移住者」ではない。「移住者」になったら、これまでのことがすべてないことにされてしまう。
・しかし、来年 3 月で自主避難者に対する補助が打ち切られる。苦しさや不安を語れない。不安を取り除く措置を取ってほしい。放射線手帳を発行してほしい。一体誰がこの責任をとるのか。また同じことを繰り返そうとしているように思える。
・親として子どもにできることは二つ。福島の人たちとのつながりを絶やさないこと。もう一つは、子どもを定期的に保養に出すこと。保養は福島と県外をつなぐ架け橋。
・保養で知り合った子どもたち同士が、将来もつながりあってくれることを願っている。

◆今年も、8 月 1 日から 5 日まで、福島の子どもを招いて「夏休み保養ステイ」を開きます。カンパやボランティアにご協力ください。

連絡先…安倍川てつ子(☎0557-51-1335)